

二十七回蒼天句会 今月の一句

令和七年一月九日 兼題…年賀状、又は自由

山眠る老いたる村を深く抱き 公子

とぐる巻き舌を出したる賀状受く 婦紗子

終い告ぐ濃墨の美しき年賀状 賢一

毛筆の衰え知らぬ師の賀状 繁一

想い出は消えず真冬の昼の月 孝志

家々に神の宿りてお正月 ムツミ

年賀状切手シートの当たり年 信江

初日待つ銀から金へ水平線 静江

冬ざるる遺影の考は八つ下 鎮夫

奥能登の岸边風舞う波の花 隆彦

添え書きに浮かぶドヤ顔年賀状 隆男

月冴ゆる興亡ありし城の跡 重子

母百寿まだまだ元気と賀状来る 紹子

今年また出せど戻らぬ年賀状 久恵